

虫の瞳 実施レポート

2022.08 作成：中野志保

本企画において、発案者・中野はクリエイションメンバーとパフォーマーに「自由な創作活動」を依頼した。このレポートでは、クリエイションの軌跡とパフォーマーへの事後アンケートの結果を掲載する。

鈴木美結 ビジュアルデザイン

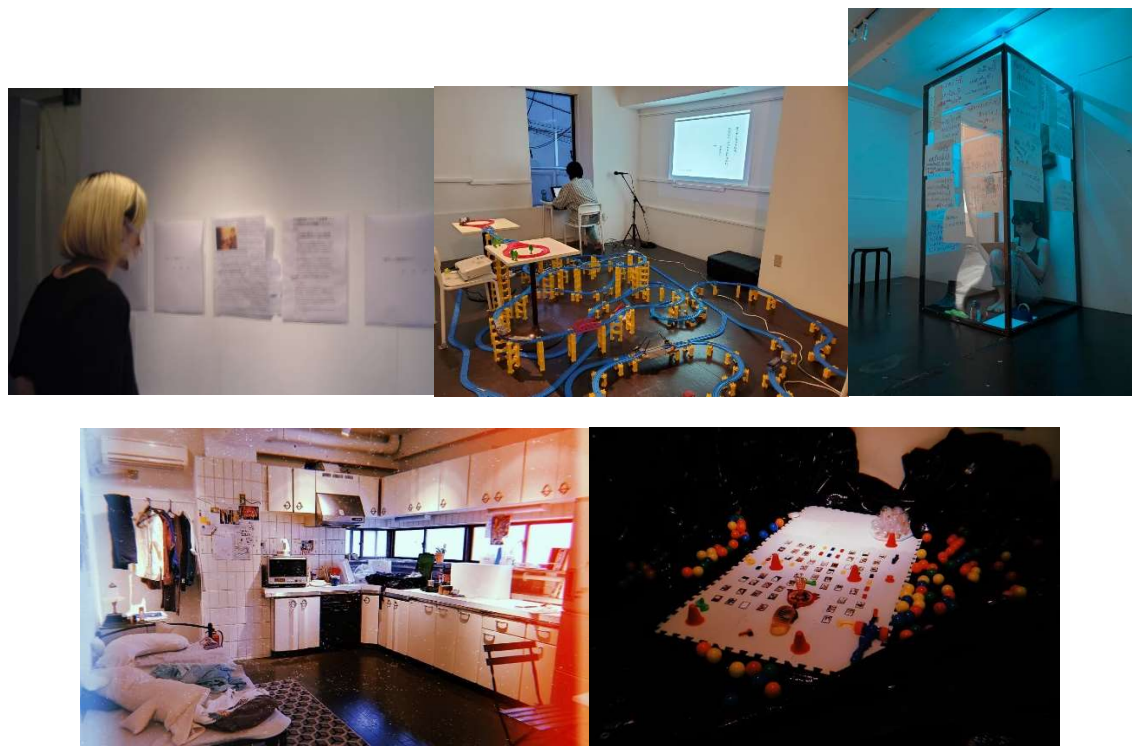


ビジュアル撮影
池田花梨

伊藤夏恵 パンフレットデザイン



Kana Jeong 空間演出



スタッフ
塩澤剛史（合同会社土言堂） 山田朋佳 濱田真実

nErd“ hair & makeup

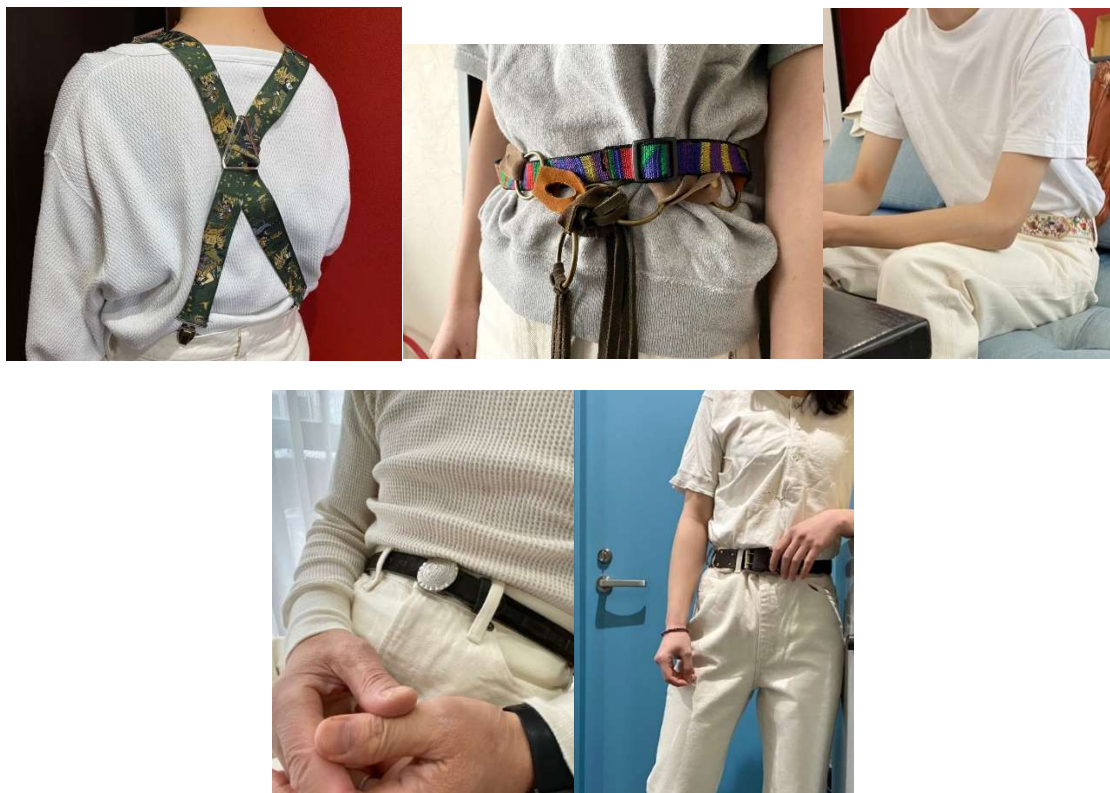
1人1人の世界
混ざり合わない
それはなぜ…??

五感による知覚の割合として83%の情報は
視覚情報からきているといわれている
たった1枚の網膜を通して
形成される世界

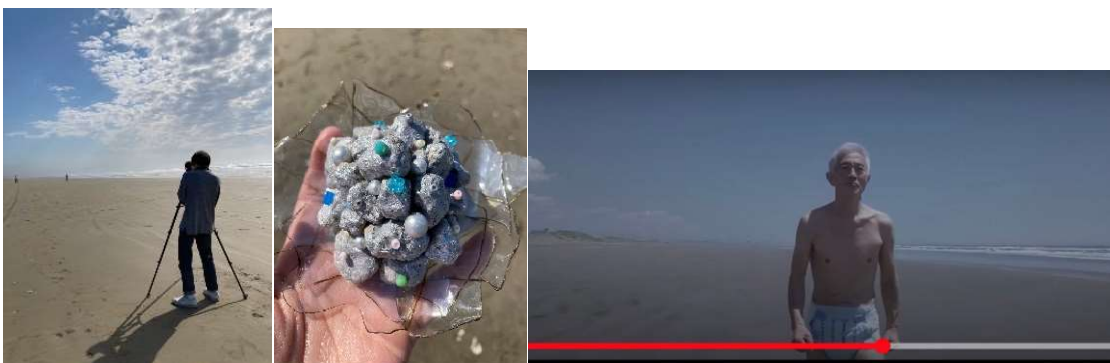
この網膜の奥は個人が持っている
ミクロコスモスの世界
網膜という名の自分というフィルター
記憶の膜、思い出



山田美奈子 衣装



廣戸彰彦 ティザー映像監督



神保治暉 パフォーマー

パフォーマンスについて「何をしたのか」説明してください。

フランツ・カフカ『変身』から着想したパフォーマンスを作りました。部屋に、3線からなるプラレールを走らせます。3つの車輜には小さな Bluetooth スピーカーが乗せてあり、それぞれ虫に変身してしまった主人公ザムザの声、家族の声、外の人声として、『変身』から引用したテキストを読み上げた音声流れます。テキストは「せりふ」と「オノマトペ」を抜粋しました。

僕は部屋の隅にある机について、ノート PC でテキストを作っていきます。そして耳から聞こえてきた「せりふ」と「オノマトペ」を、聞こえてきたままに入力します（間違っていて聞こえている場合もある）。そして、2ページ仕上がるなどの区切りが付いたらプリンターからプリントアウトします。その印刷物は、鑑賞者が自由に持ち帰っていいものとします。そのテキストには『たしかなの』というタイトルがついています。「 $\emptyset$ 」とは、空集合という意味の数学記号で、その集合の中には条件を満たす数は存在しないということを表すための記号です。

鑑賞者の存在は「ないもの」とします。僕は一人で部屋にいて、自分で仕掛けた、この、テキストを制作するための装置と空間の一部として、2時間、ただテキストを打ち込んでいきます。時折、窓の外を見たり、伸びをしたりしました。列車が時折脱線するので、それをレールに戻したり、プリントアウトされた印刷物がレールに乗ってしまっていて進行を妨げるのを介助したりもしました。そして途中で訪れる10分の休憩の前後で、机に置かれていた TENGA を撤収します。あの部屋は完全に僕にとっての「作業部屋」になりました。

僕はプレ公演+5公演という積み重ねの中で、この「作業」に耐えられなくなっていきました。2公演目からは、マシンのようにただ聞こえた音を聞こえた順にテキストにするのやめて「入力済みのテキストと順番を入れ替えてもよい」ことにし始め、詩を作ろうとしました。3公演目からは「ゾンビ映画」や「恋愛物語」などのテーマを設けて、聞こえたテキストはそのままに、なるべく物語のような筋として読めるよう編集し始めました。4公演目からは、飽きたら机に置かれていた Nintendo Switch でスマブラをプレイしてよいことにしました。5公演目は体感的には3分の1くらいの時間をゲームで過ごしていたように思います。

さて、僕は一体何をしていたんだろう。一つわかった確かなことは、僕は同じことを繰

り返し実行し続けることが心底苦手だということでした。正直、ゲームは飾りとして置いてあっただけで、まさか上演中にプレイするとは思っていませんでした。自分に甘い。実際、家で作業をしている、長時間同じ場所で同じ作業をすることもできず、散歩がてらカフェに行くなど場所をうつしたりしないと集中が持ちませんし、それで外出する気分じゃなければゲームします。寝る前はほぼ毎晩、15分ほどゲームをしてから寝るのが日課のようになっていますし。とんでもなくリアルな、僕の閉塞的な「暮らしの一面」が、そのまま上演されたという印象です。

パフォーマンスについて、行為の根拠や観客に提示したかったことなどを教えてください。

「行為の根拠」の質問の意図を、「なぜそのパフォーマンスを考えたのか」と捉えるならば、ひとえに「孤立のことを希望かのように捉えてはいけない」ことを、観客に提示したかったから、という答えになります。

ですが終わってみて振り返ると、僕は「ザムザの独白」をそのまま体現してしまうところでとどまってしまっていたことに気づきました。ザムザの独白には、強い「諦観」のエネルギーが宿っていて、それがループして鳴り響く部屋の中において、僕はほぼ、ザムザと同化するようなメンタリティになっていました。しかし実は、ザムザの独白だけが強く作用したのではなく、ザムザを隠したり咎めたりする「家族の目線」のことばたちのエネルギーの方が、僕をザムザと同化させる強い力を持っていたのだと思います。

また、鳴り響くせりふとオノマトペが、当初想定していた「聞こえてくる音」年いて以上に、「頭の中でことばを探している時に聞こえる仮想的な声」として聞こえてきてしまいました。普段、テキストを書いているときも、このようにして頭の中でことばが鳴っているなと気づきました。同時に、『変身』から脱出できないこのテキスト群が、鏡写しのように「僕は僕が知っていることばから脱出できない」ことを僕に知らしめました。

結果として、「孤立という絶望的な状況」だけがそこに滞留し、その先にあるはずだった「ではどこに希望を見出そうか」という未来に手を伸ばすことができていなかった。僕は最後までザムザの瞳を通してでしか世界を見ることができず、閉塞したまま終わってしまいました。

恐ろしいのは、僕は今、パフォーマンスで使用したものと同一ノート PC を使ってこのテキストを書いているのですが、ふとした時に、あの場で体験したり気づいたりしたことが蘇ることです。自分は今、たった一人で PC に向かっており、作業に追われていて、

それでいて自由で、いつでも甘えることができ、そしてその作業が終わって成果物が仕上がったとしても、それはただ耳から聞こえた／脳内で聞こえた音をアウトプットしたにすぎないモノがただ刷り出されたというだけ。自分がモノ化したような感じ、と言えるでしょうか。

これはつまり、人間は極度に目的化されただけの状態に居続けると、そこになんの意味も、希望も見出せなくなるということなのかもしれません。〈人はみな「孤立状態」であるがゆえ、そもそも「孤立」という寂しさ自体存在しないはずなのではないか？〉という問いを中核に持つ『虫の瞳』ですが、やはり主観的には、この孤立状態を誰がどのように定義したとて、辛いもんは辛い、それがたった一つの真実だったように、僕は思います。

そうしたことを、どこか客観的に考え、それを伝播するメディアとして在ろうとした僕でしたが、まんまとザムザは僕に憑依し、僕こそを主演にせしめました。このパフォーマンスは僕自身の人生に明瞭な体験として、孤立の何たるかを語らしめる主体性を、僕に宿してくれました。しかし、それに気づくには遅すぎました。もっと僕は僕の自分ごととして、自分の瞳で、もともと自分の中にあったはずの「孤立」を考え、そして語るべきだったのです。

パフォーマンスに鑑賞者が立ち会うこと／また鑑賞者の感想を目にしたことでパフォーマンスの行為自体に変化はありましたか。変化があった場合、それはどのような変化でしたか。

鑑賞者を「ないもの」としていたが、「ないものとしている私」はたしかに存在していて、それはつまり、本当の意味で鑑賞者を「ないものとすることはできなかった」ということになります。僕は間違いなく鑑賞者に影響されていました。鑑賞者がいないときは多めにサボってしまった。自分に甘い。逆に、鑑賞者が部屋に入ってきたときは、「どう見せようか」という邪念で体が動いていることに常時自覚的でした。これは、一人で作業している時には起こらないことなので、間違いなく「パフォーマンスしてしまっていた」のだと思います。

観られていなければ、もっとサボっていたでしょうし、完全に逃げることでできてしまえば、今ほどに「孤立」を語れるような主体性を持つまでに至らなかったと思います。「逃げられない」状況に陥った。これはつまり、観られることで変化した、といえるということなのではないでしょうか。

たしかにパフォーマンスの場からは逃げられない。上演の場には、さまざまな因果が絡んで、鑑賞者と上演者を船着き場の「もやい」のように、その「場」に縛り付けます。しかし、本当に逃げ出そうと思えば逃げ出すことはできるはずです。人がいつでも舌を噛み切って死ぬことができるのと同じように（隣室で上演された ALS にまつわるパフォーマンスのことを考えると、一概にそう括ることさえもできなくなるが、現に囑託自殺についても、自死する自由という面では同じことと言ってよいだろう）。でも「生きる意志」が残っている間はそうしない。ひるがえって、「場にとどまる意志」が残っているから、僕たちはその場にとどまるといえはしないでしょうか。

僕たちは人生の多くの局面において、ほとんど完全にそこから逃げることはできないのではないかと、僕は思います。ではなぜ、今まで僕は、作業と向き合い続ける日々（あのパフォーマンスとほぼ同様のことをする日々）の中で、今ほどに「孤立」を語るまでの主体性を持ち合わせていなかったのでしょうか。それはやはり、「孤立」という状況が実は特殊な状況で、人が本当に「孤立」を引き受けるには、社会一般や繰り返される人々とのつながりの連関の中から本当の意味で抜け出す必要があるのだと思います。逆説的に、孤立とはそういう状況のことであり、「上演の場」には、それに近い独特な状況を生み出し、孤立状態を擬似的に体験できる要件が揃っていたのかもしれませんが。実際、僕は自分の「意志」でパフォーマンスを日ごとに変えたり、飽きたらゲームをしたりして、ある程度自由でした。しかし、あの場にはいなければならないし、誰とも目を合わせたり心を通わせたりすることはできませんでした。これが本当の「孤立」なのかもしれません。

僕は「自由」とは「予定を覆す権利」のことだと考えています。いわんや、上演の場／人生から逃げ出すことは理論上では可能です。しかし、本当の意味でそこから逃げ出すということ、つまりこの権利を行使し続けるということは、およそ不可能なのです。「予定」がなくなったとき、自由を手にもすることもできなくなる。これは自由にまつわる人間のパラドックスです。人間が自由かどうかを語るには、持続性の中ではなく、瞬間の中でしか語れません。僕があのパフォーマンスの中で自由を感じたのは、勝手にルールを変更し、実行に移すその瞬間だけでした。

もう一步踏み込んで考えるとして、ではなぜ、僕はあの場にいることを「選び続けた」のでしょうか。それは僕が、パフォーマンスでいると同時に、演出者として存在していたことで、鑑賞者に何かを「持ち帰ってもらいたい」と思っていたからだと思います。僕はやはり、その鑑賞者の体験を「生産」する存在として、あの場で「生産者」になっていたのです。さらにいうと、僕は自分に「生産的であれ」と呪いをかけていた。

そう考えると、そもそも僕がこうして『虫の瞳』に参加したり、お客さん呼んで何かを上演することは、何かを生み出すという点において全て生産的な作為です。チケット代を取る／取らないにかかわらず、その場に行けば何かを得られると期待した鑑賞者が集結することに照準を合わせ、自らをその場に向かわせ、居続けさせるのだから、期待に応えるような何かを生産することを自分に課していると言えます。まとめると僕は、鑑賞者の瞳よりももっとずっと深いところで、この「生産性の有無」をはかる視線を浴び続けたのだと思います。

この視線は、何の視線なのでしょう。「意志」や「自由」よりももっと外側から、この眼差しは向けられていると僕は思います。意志も自由も、自分一人では変えることのできない「もっと大きな力」の影響を受けてしまう。そして、その場から逃げることはできないのです。僕たちはどうしたら、生産性を自分に課す人生から抜け出すことができるのでしょうか。

鑑賞者の「感想」を目にして何かが変わったかという、それはそんなに影響を受けていないのではないかと思います。ただ、机に置かれた TENGA への言及が少なかったことは気になっていて、最終日は、鑑賞者が部屋にいるときに手に取ってみるということを試してみました。

「虫の瞳」の公演期間の前後で自身の考え方に変化はありましたか。

何もかもが変わってしまったと僕は思います。それは前述の「生産性」に関わる根源的な問いと向き合い続けるうちに、資本主義の限界と、自己責任強要社会に反対する強い意見が自分の中に芽生えたからです。

「孤立状態」の要件として、社会一般や繰り返される人々とのつながりの連関の中から抜け出すというものをあげましたが、それはつまり、社会における「生産性」の対極の位置にあるといえるのではないのでしょうか。社会はサービスの安定供給を求め、人々は参加応答の不可能性を排除し、資本という均質化されたモノを通して交換しようとしています。安定供給できない／応答しないものに対して、資本は振り向きません。しかし人間とは元来、天候や体内のバイオリズムに影響されてしまって、サービスを安定供給することに向かないし、参加や応答の不可能性を完全に排除することもできません。そもそも無理がある。

さらに、感染症禍で今まで以上に明らかになった、格差の問題、ケアにまつわるパドックスやヤングケアラーに見る公助不足の問題などから考えても、現状のままの資本

主義一辺倒の考え方では本当の平等はつくれないことは明白です。これから私たちは、資本主義の「良かった面」を残しながら、いま以上に共に助け合うための社会を作っていかななくてはならず、そのための連帯を促すべく、それを妨げる権威主義者たちを説得し退けねばならないと僕は思います。

どんな人も、生産性などという観点で測られない社会のあり方とはどんなものなのでしょう。実現可能なのでしょうか。僕はこの企画を進めていく上で、至るところにつまづき得るポイントを見つけ続けました。

例えば、「なぜ僕たちはチケットを売るのか？」というつまづきです。そしてそこに紐づく、「なぜ広告するのか？」「なぜ人を呼ぶのか？」などのつまづきです。そう考えると、「なぜそこまでしてアートするのか？」という問いが影から現れます。資本主義信奉を批判しながら、資本主義的な作法を通してでしか多くの人とコミュニケーションを取れないという矛盾です。会場に入って実際に全ての準備を終えるまで、その回答を用意することができず、一貫した姿勢を保つことができないまま準備をし続けました。それは苦しかったです。しかも、集客も振るわず、どっちにも転ばない中途半端な結果を叩きつけられるのです。

僕がいまなら導き出せる一つの答えは、「なぜなら今の社会が資本主義的な作法を通してコミュニケーションを取ることを前提に成り立っているから」です。トンチのような答えかもしれませんが、ここには、そうした作法にのっとりながらも資本主義を内側から批判をしてもよいと自分に言い聞かせられるだけの厳格なロジックや意志が必要でした。

僕は、中野の提起した「孤立は絶望にしかないのだろうか」に対し、【「孤立」を「希望」としてはいけない】という自らのスタンスを定めてパフォーマンスを考案し、形にしました。そして、作り上げられた空間や状況が、思った以上に「ポップ」だったことに、僕は驚きました。プラレールでいっぱいの子供の部屋、予想外の突飛な行動に出ない神保、青や水色で統一された清潔感のある空間、丁寧にまとめられた配線、そして「演劇の台本」というフォーマットで排出されるテキスト。僕はきっと潜在的に、どうしたら鑑賞者に「まずは」受け入れてもらえるかということを考えていたのかもしれません。僕はきっと一貫して、今ある社会のルールの中で、どのようにそこから思考の羽を伸ばせるのか、について考えていたし、そこにどうやって多くの人を巻き込むか、実験を繰り返しているのだと思います。そのための衣裳として「ポップさ」をまといたいし、その内側で「毒」を仕込んで、鑑賞者に遅かれ早かれ作用したいのです。これは矛盾ではなく、順当なロジックでした。このロジックに気づいたとき、僕は僕に本当の意味で資本主義

的な作法を通して鑑賞者とコミュニケーションをとることを許可できました。

これはある意味で、「覚悟」と言い換えることができるのかもしれませんが。「この作品を人に見せることは何か有意義なことである」と、他ならぬ自分がそう思えるかどうか。ただ、これは結局、生産性を自分に課するという面において袋小路になります。しかしながら、そうだとしても、「これは資本主義的な作法を持ってしてでも鑑賞者に届けたい何かなのだ」と思えることが、もう1段階高いところにある覚悟なのです。その先で、その未来で、このような資本主義的な作法を介さずにコミュニケーションをとれる社会につながることを夢見て。

この「夢」が、今後の僕を、どんな場所にでもしっかりと立たせてくれる「台本」になりました。台本とは予定のことです。予定をたまに覆しながら生きる。これが僕の自由です。

僕はいま、ポップスを作ることに非常に関心が向いています。これは多分、ここまでに語ってきたような手順を踏んで、資本主義的な作法をもって資本主義を内側から疑問視するというのに、歴とした正当性を自身に見出すことができてきたからだと思います。

なぜ多くの人に届ける必要があるのか。それは僕が、僕自身を含むマイノリティの声なき声を見つめ、未来で少しでも多くの人が生きやすくなる社会づくりに僕が参加したいからです。「場」に集めたり、「場」を作ることは、その方法のうちの一つであり、僕はどこで・誰と・何をしても、そうした意志の源流からはぐれることはなくなりました。つまり、僕は僕自身を表現する上で、その姿がマイノリティ然としていようがマジョリティ然としていようが、それが自分の意志に悪影響を及ぼすものではないということに自信を持つことができたということです。簡単にいうと、ポップスでもいいし、インディーズでもいいし、僕は僕でしかないということがはっきりと分かり、その上で、ポップスは多くの人に届けるための一つの手段として、それを選ぶことを忌避すべきものではないということ学んだのです。

これは僕にとっての大きな変身です。

僕はもっと、苦しいものこそ愉快地に描き、その芯で人間を讃え、間違ったものを強く批判する魂を持ち続けられるよう、さらなる変身をしていくべきなのです。

高田歩 パフォーマー

パフォーマンスについて「何をしたのか」説明してください。

水槽のような空間の中で、
シュノーケルを用いて呼吸器にみたて
患者さんと同じ状況を抽象的に作り
自分の身体の内側と向き合いました。
“今の等身大の自分”の感じていることそのものを作品として提示しました。

パフォーマンスについて、行為の根拠や観客に提示したかったことなどを教えてください。

私自身、自分と向き合う時間が足りていないと
感じている時期であったため
社会のための自分ではない
もう一人の自分、の思っていることを
ただひたすら社会の皮を剥いでいくように
文字を書き、服を脱いでいきました。
最終的に、身を守る服は剥ぎ
ボックスは自分の吐き出した言葉で埋まります。
それらが観客にとって、
コロナの状況で孤立していく人に見えるのか、自分の言葉に埋もれていく人に見える
のか
自滅して行っている人に見えるのかは観客に委ねようと思っていました。

パフォーマンスに鑑賞者が立ち会うこと／また鑑賞者の感想を目にしたことでパフォーマンスの行為自体に変化はありましたか。変化があった場合、それはどのような変化でしたか。

伝えたいことは伝わっていたのかなあと思いました。
自信が無いまま臨んだ回でひとことで
必要以上に傷ついたかがあり
心情が大きく変化し、書いたことがナイフみたいになってしまいました。

「虫の瞳」の公演期間の前後で自身の考え方に変化はありましたか。

日記を書く課題からはじまり

自己と向き合う機会を意図的に

作っていただけたことで本当に今自分がしたいこと

をゆっくり考え直す機会となりました。

たくさん出てきたし、いらないと思うことをがむしゃらにやっていたなあと今は思います。

看護師として、患者さんの同じ目線に立つ方法を

本当に思い出せなくなっていたのですが

ずっとシュノーケルをつけて息苦しさをもち続けた状態、また作品として人に必要以上に視線をむけられるという感じ方をすることもあり

はじめのころ大切にしていたものを

体感として思い出すことができました。

最後まで、模索し続けましたが

最終日に天井をみたら、溜まった汗と澄んだ心で

普段の自分ではみることができない

綺麗な世界がみえて、

主催者の言いたいことは

ああ、こういうことだなあと思えました。

トム キラン パフォーマー

パフォーマンスについて「何をしたのか」説明してください。

ALS 患者の気持を理解するためのパフォーマンスとして、ブース内に ALS に関する情報を貼り出した。手足が動かず言葉も話せない状態を演じてみた。

パフォーマンスについて、行為の根拠や観客に提示したかったことなどを教えてください。

筋萎縮で運動ニューロンが障害をうけその結果、脳から「手足を動かせ」という命令が伝わらなくなる。同様に日常生活を維持する筋肉への命令も伝わらなくなる。
この様な状態を鑑賞者に提示して、第 1 に ALS を知ってもらう。第 2 に患者の気持を知ってもらう。第 3 に何故「孤立」するのかを想像してもらう。
第 4 に「孤立」は「絶望」にしか繋がらないのかを考えてもらう。

パフォーマンスに鑑賞者が立ち会うこと／また鑑賞者の感想を目にしたことでパフォーマンスの行為自体に変化はありましたか。変化があった場合、それはどのような変化でしたか。

私は鑑賞者に「もしもあなたが患者の家族だったら…」という気持ちになっていただけたら…その立場でどう思うか？というメッセージもブース内に貼り出していた。鑑賞者から質問を受けたが、家族の気持を汲み取った上での質問となっていなかった様な気がする。

しかし、ALS の病気や気持を理解しようとする質問が多数であった。

私は、口に指し棒を咥えて透明な文字盤を指し鑑賞者と会話をした。コミュニケーションの難しさを実感した。鑑賞者も同じ気持ちだったと思う。

私は気持ちを伝える困難さから、心がだんだん閉じこもり「孤立」へと向かうだろうと思った。

ある鑑賞者が「水を飲みますか？」と聞いてくれた。私は飲みたかったが「大丈夫、有難う」と断った。口から指し棒を外すと、溜まった唾液が溢れ、その人に不快な気持ちや、その人の手を煩わせるのが嫌だったから。つまり「遠慮」したのである。コミュニケーションの難しさを毎回実感しつつ質問を受け続け、だんだん自分の気持ちを伝える事が面倒にもなっていた。その場を逃げ出したい気持ちもあった。

「虫の瞳」の公演期間の前後で自身の考え方に変化はありましたか。

情報の中に「難病患者」をどのように支援するか…の技術についての資料も貼り出した。私は現役のケアマネージャーである。パフォーマンスによって患者が閉じこもり「孤立」して行く状況や気持ちがわかった。では、患者をどのように支援するかを考えよう。患者を守るために定められた社会資源を「駒」の様に、定められたルールに沿って「配置」する。これが患者をケアする為のマネジメントだ。不謹慎にも「駒」と表現したのは、守るべき存在を守り切れない事があり、その原因の殆どが「駒」不足によるもので、社会資源不足なのです。病気の進行により閉じこもり「孤立」となる。その患者を更に「孤立」へ閉じ込めてしまうマネジメントしか出来ないと嘆く現状が浮かび上がる。

ALS 患者囑託殺人事件、もし依頼者に個人を尊重したマネジメントが出来ていたら…この事件は起こらなかったかも知れない。異性による排泄介助は、やはり尊厳を守るという観点からは許される事では無いと思う。

定められた社会資源が乏しく、定められたルールが尊厳を守るという観点に即していない。つまり政治がそれらを定めている。政治を変えなければ、ケアも変わらない。どんなに整備しても、次から次へと問題が起こると思うが、こういう現状が有るというのは事実なのだから。患者の約 7 割が気管切開を拒否している。何故？その理由の多くは家族への気遣い「遠慮」です。自分の為に介護や看護で辛い想いをさせたくないという気持ちから拒否しています。では、この 7 割の患者はどんな苦痛を伴いながら死んでいくのか…それぞれ、と思うが、苦しんで苦しんで亡くなる方もいる筈です。現在の日本においては安楽死・尊厳死は合法化されていない。では ALS 患者は緩和医療を受けられるのか？研究は手探りで進められルール範囲内で実施されているようですが…しかし現在は癌と AIDS 患者だけが緩和ケア病棟、つまりホスピスへの入院を許されている。日本国憲法 13 条に「生命、自由及び幸福追求に対する国民の権利」すべての国民は個人として尊重されると書かれている。十分な緩和医療を積極的に受けられないのはおかしい。ホスピス病棟は病状が緩和し落ち着いたら一時帰宅出来る。そして家族と過ごす時間が持てる。そのときには、それなりのマネジメントをすることになる。つまり、看護師を配置し訪問医師と連携する、重度訪問介護士を配置する…等など。3 割の患者は気管切開を選択。その内の何割かの人は、社会参加や社会交流をヘルパーの付き添いの元に果たしている。或いは、自分の意志で自分の想いを発信している。何れにしても 3 割の人は家族や友人やケアマネジメントによって守られている。社会資源が確保されているという事です。しかし、自分の病状についての情報を本人が 1 番よく理解している。結局は医療でも病気を治す事は出来ず、リハビリを受けても身体が動く様にならず、しっかりした支援体制も明日はどうなるかわからない。という不安な気持ちに戻る事は常にある。そういう意味で「孤立」状態から逃れる事が出来ないのではな

いか？とパフォーマンスを通して感じた。しかし、気管切開をして延命した患者は親戚や家族と一緒に孫の笑顔に触れ喜びを感じたり。昔のクラブ活動で苦楽を共にした大勢の仲間と楽しい時間を過ごしている。その様子の写真もパフォーマンスブースに貼り出した。この方々は「孤立」ではあるかも知れないが「孤独」ではないと感じた。私はケアマネージャーとして、一人の人間として、現在の政治へ「すべての国民は個人として尊重されるべき」という観点から、ALS 患者や難病患者への支援体制をマネジメント出来るものにするべく尽力していただきたい。緩和医療についても同様をお願いしたい。その上で患者様方に、いろいろな選択肢をお知らせ出来る事が大事だと思っています。私が願うのは「孤立」の状態であっても「生きる希望への支援」をする事です。

中野志保 パフォーマー

パフォーマンスについて「何をしたのか」説明してください。

脈拍を測り、メトロノームで他人に自分の心拍数を発信する。また、脳の模型が入ったカプセルを自分の興味に従って観察する。近くにカラーボールやおもちゃがたくさんあるがそれらには目を向けない。

鑑賞者が入室するたびに脈拍を測定しなおし、脳の模型が入ったカプセルは、時折鑑賞者に向かって転がす。その際、散りばめられたおもちゃが邪魔をしてカプセルがスムーズに進まない状況を作る。

公演中はコンタクトレンズ及び眼鏡を着用せず、鑑賞者の顔が見えない状況でパフォーマンスを行う。

半顔には nErd”氏にデザインしてもらった透明のフィルムを載せ、鑑賞者のほうを向いたときにのみ加工した半顔が見えるような角度で座った。

パフォーマンスについて、行為の根拠や観客に提示したかったことなどを教えてください。

鑑賞者には「頭の中を共有できないが、相手は、自分の目の前で生きている」ということを意識させたかった。そのため、自身の考えていることや興味が簡単には推測されないように努めた。散りばめられたおもちゃは、福祉事業所において児童・成人問わず与えられるものであり、健常者の「知的障がい者は知能レベルが健低いため、子供のものに興味・関心をもつ」という偏見は、障がい者の生きづらさを増幅させているのではないかという問題提起をするために使用した。半顔につけたフィルムはザムザの虫の状態で示し、表情変化を少なくするよう心掛けた。

パフォーマンスに鑑賞者が立ち会うこと／また鑑賞者の感想を目にしたことでパフォーマンスの行為自体に変化はありましたか。変化があった場合、それはどのような変化でしたか。

「他人の頭の中を完全に共有することは不可能であるのだから、万人が孤立しているといえる」という持論を掲げていたにもかかわらず、公演期間中に鑑賞者の反応を見聞きし、精神的な寂しさや孤独感を感じている自分に気が付きショックを受けた。当初は、自分のパフォーマンスが自分の意図と異なる角度から受けとられることを厭わず、展示部屋での鑑賞者の過ごし方がどんな様子でも受け入れようと思っていた。しかし、公演期間が進み、鑑賞者の前に立つ時間が積み重なるにつれ、「伝えたい」という気持ちが強まり、「相手に伝わりやすいだろうと思うかたち」に変えていった。

「虫の瞳」の公演期間の前後で自身の考え方に変化はありましたか。

公演期間の終盤、自分の脈拍を示すメトロノームに合わせて身体を左右に揺すり、私の顔を心配そうに覗き込んだ鑑賞者がいた。コンタクトレンズを外していた私にはその人が誰かわからなかったが、彼女のとった行動は私に精神的に寄り添ってくれるような感覚を与え、彼女が退室したのちに思いがけず涙したのを覚えている。

一方、彼女の次の回に来場した鑑賞者たちは、30分ほど自分の部屋に滞在したのち、部屋にあるカラーボールを投げたり部屋にあるおもちゃで自由に遊んだりして帰っていった。鑑賞者がそのような過ごしている時間、最初は全く気にせず自分のパフォーマンスを継続していた。しかし、途中から疎外感、孤独感を感じはじめた。それは「自分の提示したかったことが伝わっていない」という思い込みと「その場にいる自分のことを誰も真剣に考えてくれていないのではないか」という思い込みによるものだった。これはあくまで自分の思い込みであり、鑑賞者が私のパフォーマンスをどのように受け取ったかは分からない。

先に掲げていた持論は、こんなにも強度のないものだったのかと衝撃を受けるとともに、伝えたい・わかってほしい・理解されたいという自分の欲求とどのように向き合っていくべきなのかを考える必要があると感じた。

山本史織 パフォーマー

パフォーマンスについて「何をしたのか」説明してください。

何か目的に向かっていない、作品を作るプロセスの第0段階としての「暇」な時間を過ごした。

具体的には下記のようなアクションをその時の気分に応じて行った。

ベッドに寝っ転がる

椅子に座ってぼーっとする

紅茶を淹れる

観葉植物に水をやる

カップ麺を食べる

スナックを食べる

本や漫画を読む

パフォーマンスについて、行為の根拠や観客に提示したかったことなどを教えてください。

ニュートンはペストで大学が閉鎖されている間、やむなく実家に帰り18ヶ月の休暇を過ごした。その中でリンゴが木から落ちる様子を見て、それが万有引力の発見につながった。後にニュートンは、この期間を「創造的休暇」と呼んだ。また、シェイクスピアは4大悲劇のうちの3作品「オセロー」「リア王」「マクベス」をペストが流行している間に完成させたといわれている。

一方現代ではすぐに分かりやすい成果を出さないものは軽視される傾向にある。基礎研究などは長期的にしか結果が見えてこないが必要不可欠なものに予算が割かれなくなって、研究全体の衰退が懸念されている。また、日本の大学の問題点は研究者が事務作業など本来の研究以外の仕事に追われて忙しいこと。暇がないことがパフォーマンスの低下につながっていると言われている。

これはアートの分野にも同じことが言える。コロナ禍で演劇や美術、音楽は不要不急と言われた。これはコロナ禍でのみのことではなく、普段からあった意識の顕在化に過ぎない。アートもまた即効性のある媒体ではないので短期的には効能が見えにくい。しかしアートは、社会を見つめ、映し出し、問題提起をすることによって対話を生む。その作品の創造にも「暇」は必要である。

「生産性のない生」を「資本主義の価値観の中で短期的に金銭で換算しやすい価値を生み出していない様」と解釈し、ニュートンの言う「創造的休暇」のような創造のプロセスの一つとしての暇な時間を展示した。側から見ると、生産性のない、働いていない、怠惰な状態にも見えるかもしれない。しかしこれは私にとって思考を耕すある意味有意義な時間である。

パフォーマンスに鑑賞者が立ち会うこと／また鑑賞者の感想を目にしたことでパフォーマンスの行為自体に変化はありましたか。変化があった場合、それはどのような変化でしたか。

分かりづらさの割合の多い作品ということもあり、来場者の反応に予想がつかないところもあったが、多くが長い間一つの部屋に滞在したり、同じ部屋に何回も戻ったり、展示空間内で思考を巡らすのに十分な時間をとっていたように感じた。おそらく一見意味のないこと、理解できない行動に見えたとしても来場者自身がアーティストは何を考えて、どういう理由でこのパフォーマンスをしているのか、または観客自身がこのパフォーマンスにどういう意味を見出すのかを考えていたのだろうと推測できる。それは「暇な時間」という資本主義の下では価値の低い、排除される対象である行動をしていた私に居場所を与えた。もちろんアートという枠の外に出たら人々の見方は変わるだろう。しかし少なくともアートという枠の中では時間をかけて自分とは違うかもしれない価値観や他の人の世界の見方を覗き見ることができる。

金氏鉄平は「アートとは、よくわからないものの存在を認めるための練習」だと言った。こうした他人の靴を履こうとする練習をする機会があることによって、現実世界でも自分と違う価値基準を持った人を受け入れ、その人たちの居場所を作ることができるのではないだろうか。

「虫の瞳」の公演期間の前後で自身の考え方に変化はありましたか。

暇な時間のパフォーマンスという実験を行ったことで暇な時間が創造に必要であることに確信を持ち、さらには民主主義や多様性にもこの暇な時間が必要であることを強く感じた。